

## 平成 26 年度学術賞受賞者

### 津 金 昌一郎 博士

国立がん研究センターがん予防・検診研究 センター センター長

**研究業績** 大規模コホート研究に基づくエビデンスの構築と日本人のためのがん予防法の提言  
Providing evidence from a large-scale cohort study and proposing cancer prevention methods for Japanese

### 津金昌一郎博士のプロフィール

津金昌一郎博士は東京都港区に生まれ、慶應義塾高等学校から同大学法学部法律学科に推薦で進学したものの、改めて医学部受験を決意し、同大学医学部に入学されました。

医学部6年生の時、部活動として南米4か国を歴訪する中で、ラテンアメリカに魅せられると同時に、異文化の中で日本人として暮らす移住者の生活に興味を抱いたことが、研究者としての起点となりました。卒業後は、人類生態学の研究者を志して社会医学系大学院に進み、主としてボリビアの数百人規模の日系人移住地をフィールドとして研究に没頭しました。大学院修了後、国立がんセンター研究所に奉職することになり、ボリビアから百万規模の日系人が暮らすブラジルにフィールドを移して疫学研究を実施、現在に至るまで継続していることが、博士のその後のがん予防のための幅広い研究活動のエネルギー源にもなっているそうです。

所属部署では、間もなく日本でのがんの大規模コホート研究(多目的コホート研究)の立ち上げが決まり、疫学研究の経験や実績がない少数の研究者らが見よう見まねで取り組むことになりました。幸いにも、保健所などの献身的な協力のもと、10万を超す参加者を得て現在に至っています。その間、博士はハーバード大学のWalter Willett教授に師事し、最先端のコホート研究を学び、帰国後に国際的な水準を見据えて、調査方法を含むコホート研究の軌道修正を行い、その質を高めるための努力を怠らなかったことが今日の成果に結びつきました。

2004年のがん予防・検診研究センターが設置され、予防研究部長となってからは、単に疫学研究からのエビデンスを論文発表するだけでなく、いかに予防の実践に繋げるかという観点から、公衆衛生分野のトランスレーショナル・リサーチとも言える「日本人のためのがん予防法」を提言するための研究に取り組み、集大成ともいえるその成果を含めて、今回の受賞につながりました。博士の人柄と研究に引きつけられた有能な若手研究者や研究支援者に恵まれたことも、今日までの業績の大きな要因となっています。

(文責 津田洋幸)

## **「大規模コホート研究に基づくエビデンスの構築と日本人のためのがん予防法の提言」の業績のあらまし**

がん予防を実現するためには、信頼性の高い疫学研究に基づくヒトにおける科学的根拠(エビデンス)が必須です。博士は、国立がんセンター研究所疫学部勤務以来、現在に至るまでがん予防研究の第一線で数々の疫学研究を遂行し、がん予防戦略の核を担うべきエビデンスを500報以上の英文論文に発表しました。代表的な研究として、国内最大規模の約14万人を対象とした「多目的コホート研究(JPHC Study)」がありますが、1990年に開始した研究の立ち上げから現在に至るまで終始中心的役割を担ってきました。これまでに、このコホート研究の20年以上の成果の蓄積を経て250報以上の英文論文の発表があります。その真骨頂は、日本人コホートならではのユニークな解析にあります。

日本食に多い塩分による胃がんリスクの増加、逆に、大豆イソフラボンや魚の n-3 不飽和脂肪酸のがん予防効果を示した報告などは、国際的に高い評価を受け、数多く引用されています。また、糖尿病が大腸、肝、膵、子宮体がんなどのリスクになることを早くから指摘し、それが日本癌学会と日本糖尿病学会の合同委員会発足の契機となり、2つの重要疾患の克服のための国家的な取り組みに結びつきました。

津金博士の指導してきたJPHC Studyは、発がんに関わるゲノム網羅的SNP解析・メチル化解析による遺伝的要因と環境要因との相互作用の探索など、オミックス研究の新たな展開に進展して、その成果が報告されつつあります。2011年からは、次世代の疫学研究者らを主導して、JPHC-NEXTという新たな分子疫学コホート研究を誕生させ、将来の個別化がん予防に備えた研究基盤の布石が順調に経過しており、その成果は大いに期待されています。

さらに、博士はJPHC研究に集中するだけでなく、広く日本人のがん予防法開発を目指す研究班を立ち上げ、その成果として日本の研究の系統的レビューや統合解析などの結果に基づいて「日本人のためのがん予防法」や「日本人のがんの原因」(欧米とは異なり、日本人では「たばこ」に次いで、肝炎ウイルス・パピローマウイルス・ヘリコバクターピロリ菌などの感染が大きな割合を示した)について報告しています。これらの成果は「がん対策推進基本計画」、「第2次健康日本21」の策定の根拠となり、さらに30年ぶりに改訂された「がん予防新 12か条」の作製にも貢献されました。博士の一步先を読みながら研究を進めてきた素晴らしい業績は、国内外で高く評価されています。(文責 津田洋幸)

### **略 歴**

- 1981年 慶應義塾大学医学部卒業
- 1985年 同大学大学院修了(医学博士)
- 1986年 国立がんセンター研究所疫学部研究員
- 1988年 国立がんセンター研究所疫学部室長
- 1992年 ハーバード公衆衛生大学院訪問研究員
- 1994年 国立がんセンター研究所支所臨床疫学研究部長
- 2003年 国立がんセンターがん予防・検診研究センター予防研究部長
- 2013年 国立がん研究センター がん予防・検診研究センター センター長